

6.11 [日]	第97回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ 横浜みなとみらいホール／14時開演 Yokohama Minato Mirai Holiday Popular Series, No. 97 Sunday, 11th June, 14:00 / Yokohama Minato Mirai Hall
6.13 [火]	第603回 名曲シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 Popular Series, No. 603 Tuesday, 13th June, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／ダニエル・ブレンドゥルフ Conductor DANIEL BLENDULF P. 6

チェロ／宮田 大 Cello DAI MIYATA P. 8

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster Kota Nagahara

シベリウス 組曲〈レンミンカイネン〉から
“トゥオネラの白鳥” [約10分] P. 10
SIBELIUS / The Swan of Tuonela

ショスタコーヴィチ チェロ協奏曲 第1番 変ホ長調 作品107 [約30分] P. 11
SHOSTAKOVICH / Cello Concerto No. 1 in E flat major, op. 107
I. Allegretto
II. Moderato – III. Cadenza – IV. Allegro con moto

[休憩 Intermission]

リムスキー＝コルサコフ 交響組曲〈シェエラザード〉 作品35 [約42分] P. 12
RIMSKY-KORSAKOV / Scheherazade, op. 35
I. 海とシンドバッドの船
II. カランダール王子の物語
III. 若い王子と王女
IV. バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[事業提携] 東京芸術劇場（6/13）
[協力] 横浜みなとみらいホール（6/11）



6.17 [土]	第198回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 198 Saturday, 17th June, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
6.18 [日]	第198回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 198 Sunday, 18th June, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／シモーネ・ヤング Conductor SIMONE YOUNG P. 7

ヴァイオリン／ネマニャ・ラドゥロヴィチ Violin NEMANJA RADULOVIĆ P. 8

特別客演コンサートマスター／日下紗矢子
Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ワーグナー 歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲 [約11分] P. 14
WAGNER / “Der fliegende Holländer” Overture

ブルッフ ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26 [約24分] P. 15
BRUCH / Violin Concerto No. 1 in G minor, op. 26
I. Prelude : Allegro moderato – II. Adagio
III. Allegro energico

[休憩 Intermission]

ブラームス 交響曲 第2番 ニ長調 作品73 [約43分] P. 16
BRAHMS / Symphony No. 2 in D major, op. 73
I. Allegro non troppo
II. Adagio non troppo
III. Allegretto grazioso (Quasi Andantino)
IV. Allegro con spirito

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[事業提携] 東京芸術劇場



6.19 [月]	第14回 読響アンサンブル・シリーズ よみうり大手町ホール／19時30分開演(19時から解説) Yomikyo Ensemble Series, No. 14 Monday, 19th June, 19:30 (Pre-concert talks from 19:00) / Yomiuri Otemachi Hall
----------	--

※出演者と曲目のみ掲載しています。曲目解説は当日別紙を配布予定です。

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

ヴァイオリン／日下紗矢子 (特別客演コンサートマスター)

Violin Special Guest Concertmaster SAYAKO KUSAKA

ナビゲーター／鈴木美潮 (読売新聞東京本社 社長直属教育ネットワーク事務局専門委員)

Navigator MISHIO SUZUKI

ショスタコーヴィチ (バルシャイ編) **室内交響曲** ヘ長調 作品73a [約40分]
SHOSTAKOVICH (arr. Barschai) / Chamber Symphony in F major, op. 73a

- I. Allegretto
- II. Moderato con moto
- III. Allegro non troppo
- IV. Adagio
- V. Moderato

[休憩 Intermission]

シューベルト (マーラー編) **《死と乙女》** (弦楽合奏版) [約40分]
SCHUBERT (arr. MAHLER) / Der Tod und das Mädchen (string orchestra version)

- I. Allegro
- II. Andante con moto
- III. Scherzo
- IV. Presto

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

6.24 [土]	第569回 定期演奏会 東京芸術劇場コンサートホール／18時開演 Subscription Concert, No. 569 Saturday, 24th June, 18:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
6.26 [月]	非破壊検査 Presents 第17回 大阪定期演奏会 フェスティバルホール／19時開演 Subscription Concert in Osaka, No. 17, presented by Non-Destructive Inspection Co., Ltd Monday, 26th June, 19:00 / Festival Hall

指揮／シモーネ・ヤング Conductor SIMONE YOUNG P.7

ピアノ／ベフゾド・アブドゥライモフ Piano BEHZOD ABDURAIMOV P.9

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster Kota Nagahara

プロコフィエフ **ピアノ協奏曲 第3番** ハ長調 作品26 [約27分] P.17
PROKOFIEV / Piano Concerto No. 3 in C major, op. 26

- I. Andante - Allegro
- II. Andantino
- III. Allegro ma non troppo

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス **アルプス交響曲** 作品64 [約47分] P.18
R. STRAUSS / Eine Alpensinfonie, op. 64

夜 - 日の出 - 登り道 - 森への立ち入り - 小川に沿って歩く - 滝 - 幻影 -
花咲く牧場 - 山の牧場 - 林で道に迷う - 氷河 - 危険な瞬間 - 頂上にて -
幻 - 霧が立ちのぼる - 日はしだいにかげる - 哀歌 - 嵐の前の静けさ -
雷雨と嵐 - 下山 - 日没 - 終結 - 夜

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[特別協賛] 非破壊検査株式会社 (6/26)
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業) (6/24)
[協力] アフラック (6/24)、コジマ・コンサートマネジメント (6/26)
[事業提携] 東京芸術劇場 (6/24)
[マネジメント] キョードー (6/26)



ダニエル・ブレンドウルフ

Daniel Blendulf

北欧生まれの新鋭
待望の日本デビュー

コンサートとオペラの両方で活躍する北欧生まれの期待の新鋭が、読響を指揮して日本デビューを飾る。リムスキー=コルサコフの〈シェエラザード〉でどんな甘美な響きを聴かせてくれるのか。チェリスト出身だけに、

宮田大と共演するショスタコーヴィチのチェロ協奏曲にも注目だ。

1981年ストックホルム生まれ。ハインリッヒ・シフに師事してチェロを学び、マーラー室内管、ルツェルン祝祭管のチェロ奏者や弦楽四重奏のメンバーとして活躍した後、指揮に転向。2008年にスウェーデン指揮者コンクールで1位となり、注目を浴びた。10年にストックホルム王立音楽院を卒業後、これまでにスウェーデン放送響、フィンランド放送響、エーテボリ響、BBCウェールズ管、シドニー響、ニュージーランド響などに客演し、北欧を代表する若手指



©Marco Borggreve

揮者として高く評価されている。また、オペラではスウェーデン王立歌劇場やノルランド歌劇場でビゼー〈カルメン〉、ドニゼッティ〈ドン・パスクワレ〉、ベルク〈ヴォツェック〉、グノー〈ファウスト〉などを指揮して好評を博した。

16年からスウェーデンのダーラ・シンフォニエッタの首席指揮者を務め、古典からスウェーデンの現代作曲家まで幅広いレパートリーを取り上げている。

◇6月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇6月13日 名曲シリーズ

シモーネ・ヤング

Simone Young

欧米で大活躍の実力派
読響に初登場

欧米の一流オーケストラ、歌劇場で大活躍する女性指揮者が、満を持して読響に初登場する。ウィーンやハンプルクなどドイツ語圏を中心に高い評価を得ている実力派だけに、リヒャルト・シュトラウスの大作〈アルプス交響曲〉などに期待が高まる。

オーストラリア・シドニー生まれ。シドニー音楽院で作曲、指揮、ピアノを専攻し、オーストラリア・オペラで名匠マッケラスに学ぶ。1985年にシドニー・オペラハウスでデビューした後、ケルン歌劇場でコンロン、ベルリン国立歌劇場でバレンボイムに師事。93年にウィーン国立歌劇場で指揮して国際的な注目を浴びた。98年～2002年にベルゲン・フィル、01年～03年にオーストラリア・オペラの首席指揮者を歴任した後、05年～15年にハンプルク国立歌劇場総裁兼ハンプルク・フィル音楽総監督を務め、名声を



©Berthold Fabricius

確かなものにした。

これまでにウィーン・フィルやベルリン・フィル、パリ・オペラ座やメトロポリタン歌劇場などに客演している。特にワーグナーやR. シュトラウスを得意とし、ウィーン、ベルリン、ハンプルクの国立歌劇場で〈ニーベルングの指環〉全曲を指揮したほか、バイエルン国立歌劇場の〈サロメ〉〈影のない女〉などで好評を博した。録音はエムス・クラシックからブラームスの交響曲全集などが出ている。

◇6月17日 土曜マチネーシリーズ
◇6月18日 日曜マチネーシリーズ
◇6月24日 定期演奏会
◇6月26日 大阪定期演奏会



©Yukio Kojima

チェロ 宮田 大

Cello Dai Miyata

日本の若い世代を代表するチェリストとして国内外で精力的に活躍している。1986年宇都宮市に生まれ、3歳からチェロを始めた。2005年に日本音楽コンクールで第1位、09年にロストロポーヴィチ国際チェロコンクールで日本人として初優勝し、脚光を浴びた。同年、ジュネーヴ音楽院を卒業、13年6月にクロンベルク・アカデミー修了。国内の主要オーケストラのほか、パリ管、スロヴァキア・フィルなどと共演している。室内楽でもクレメール、バシユメット、ヴェンゲーロフ、デュメイラ世界的演奏家と共演を重ねている。

◇ 6月11日 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
◇ 6月13日 名曲シリーズ



©Charlotte Abramow / DG

ヴァイオリン ネマニャ・ラドウロヴィチ

Violin Nemanja Radulović

異彩を放つ若手ヴァイオリニストとして世界的に注目を集める。1985年ベオグラード生まれ。14歳でフランスへ渡り、パリ国立高等音楽院で学ぶ。2003年にハノーファー国際コンクールで優勝し、超絶技巧と特異な演奏スタイルで一躍、話題となる。これまでにフランス国立放送フィル、ミュンヘン・フィル、モントリオール響などと共演し、カーネギーホールをはじめ欧米の主要コンサートホールでリサイタルを開いている。録音はドイツ・グラモフォンなどから多数出しており、15年にはドイツの権威あるエコー・クラシック賞を受賞した。

◇ 6月17日 土曜マチネシリーズ
◇ 6月18日 日曜マチネシリーズ



©Cristian Fatu

ピアノ ベフゾド・アブドゥライモフ

Piano Behzod Abduraimov

拔群のテクニックとみずみずしい感性で人気を集める新世代のピアニスト。1990年ウズベキスタンのタシュケント生まれ。地元の音楽院でピアノを学んだ後、アメリカへ渡って研鑽を積む。2009年にロンドン国際コンクールで優勝した後、デットワ指揮のロイヤル・フィル、アシュケナージ指揮のシドニー響と立て続けに共演して脚光を浴びた。これまでにボストン響、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管、ミュンヘン・フィル、ロサンゼルス・フィルなどと共演し、欧米の主要都市でリサイタルも開いている。

◇ 6月24日 定期演奏会
◇ 6月26日 大阪定期演奏会

6.11 [日]

6.13 [火]

飯尾洋一 (いいお よういち)・音楽ライター

シベリウス

組曲〈レンミンカイネン〉から“トゥオネラの白鳥”

作曲：1893年／初演：1896年4月13日、ヘルシンキ／演奏時間：約10分

フィンランドを代表する作曲家ジャン・シベリウス（1865～1957）が国民的叙事詩「カレワラ」にもとづいて作曲した組曲〈レンミンカイネン〉（四つの伝説）の、第2曲がこの“トゥオネラの白鳥”である。「カレワラ」とは「英雄たちの住む場所」を意味する長大な民族叙事詩で、19世紀半ばに刊行され、当時ロシアの支配下にあったフィンランド国民の精神的支柱となつたとされる。

強固な民族意識を持ち、学生時代より「カレワラ」に深い関心を抱いてきたシベリウスは、たびたびこの叙事詩をインスピレーションの源として音楽作品を生み出している。組曲〈レンミンカイネン〉もそのひとつ。当時、ワーグナーに心酔していたシベリウス

は、「カレワラ」にもとづく神話的オペラ〈船の創造〉を構想する。しかし、やがてオペラの完成を断念し、その際、前奏曲として考えていた作品を“トゥオネラの白鳥”に改作する。これに“レンミンカイネンと乙女たち”“トゥオネラのレンミンカイネン”“レンミンカイネンの帰郷”の3曲が書き足され、4曲からなる組曲〈レンミンカイネン〉に仕立てられた。もともと独立した作品だったこともあり、“トゥオネラの白鳥”は単独で演奏される機会も多い。

静かにさざめくような弦楽器を背景に、イングリッシュ・ホルンが寂寞と（せきばく）した主題を奏でる。この世とあの世の境目を流れるトゥオネラ川に浮かぶ白鳥の姿が、夢幻的に描かれる。

楽器編成／オーボエ、イングリッシュ・ホルン、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（太鼓）、ハープ、弦五部

ショスタコーヴィチ チェロ協奏曲 第1番 変ホ長調 作品107

作曲：1959年／初演：1959年10月4日、レニングラード／演奏時間：約30分

ソ連時代を代表する作曲家ドミトリ・ショスタコーヴィチ（1906～75）は、2曲のチェロ協奏曲を残している。いずれも名奏者ムスティスラフ・ロストロポーヴィチのために作曲された。

ショスタコーヴィチが最初の協奏曲を書くとき発表したのは1959年6月のこと。ピアノ編曲版が仕上がったという知らせを受けたロストロポーヴィチは、モスクワから作曲者のいるレニングラードへと急行した。楽譜を受け取ったロストロポーヴィチは、4日後のリハーサルにはすでに曲を暗譜して現れて、作曲者を驚かせた。そのロストロポーヴィチとムラヴィンスキー指揮レニングラード・フィルによる初演は大成功を収めた。

ショスタコーヴィチがチェロ協奏曲の作曲を思い立ったきっかけは、プロコフィエフの交響的協奏曲を聴いて、このジャンルに挑戦したいと創作意欲を刺激されたことによる。このプロコフィエフ作品もロストロポーヴィチに献呈されたものであり、旧作の協奏曲をロストロポーヴィチの協力を得て交響的協奏曲として改作された経緯を持

つ。ショスタコーヴィチは、この曲のレコードを音が出なくなるほどくりかえして聴いたとロストロポーヴィチに語っている。

第1楽章 アレグレット 行進曲風の主題で開始される。この軽快だがアイロニーを滲ませた主題は、旧作の映画音楽「若き親衛隊」で用いられた“処刑への行進”に由来する。独奏チェロに加えて、ホルンが第二の独奏楽器のように活躍する。

第2楽章 モデラート 弦楽合奏とホルンによるひそやかな導入に続いて、独奏チェロが痛切な主題を奏でる。後半ではチェロのハーモニクス（透明感のある高音を出す特殊奏法）とチェレスタの対話が、虚ろな表情を描く。

第3楽章 カデンツァ 独奏チェロのみによって演奏される長大なカデンツァが独立した楽章として扱われている。切れ目なく第4楽章に続く。

第4楽章 アレグロ・コン・モート 緊迫感と歪んだユーモアにあふれた急速楽章。第1楽章冒頭主題が回帰して、けたたましく曲を閉じる。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン、ティンパニ、チェレスタ、弦五部、独奏チェロ

リムスキー＝コルサコフ 交響組曲〈シェエラザード〉 作品35

作曲：1888年／初演：1888年11月3日、サンクトペテルブルク／演奏時間：約42分

管弦楽法の大家として知られるロシアの作曲家ニコライ・リムスキー＝コルサコフ（1844～1908）の代表作が、交響組曲〈シェエラザード〉。イスラム世界の説話集『千夜一夜物語』を題材に、二管編成のオーケストラとは思えないほどの豊かな色彩感により、異国情緒にあふれた^{けんらん}絢爛たる音絵巻を描く。

『千夜一夜物語』は、外枠の大きな物語のなかで、多数の小さな物語が語られる枠物語になっている。シャリアール王は妃が奴隷たちと不貞を働いていることを知る。傷心の王は女性不信に陥り、妃と奴隷たちを処刑する。そして毎夜、生娘を呼び、一晚過ごしては翌朝に首をはねる暴君に成り果てる。やがて大臣の娘シェエラザードが自ら王のもとへ赴く。シェエラザードは王に不思議な物語を聞かせる。「今日はここまで」と話を終えるシェエラザードに、続きを聞きたい王は処刑を思い留まる。そんな日々が千一夜続いた末に、王はシェエラザードを妻に^{めと}娶る。

毎夜シェエラザードが命がけで語る物語が、シンドバッドの冒険であり、（この曲には登場しないが）アラジン

の魔法のランプである。ただし『千夜一夜物語』には多くの版があり、その物語も多岐にわたり、各楽章で作曲家がどの物語を念頭に置いていたかは、必ずしも判然としない。

第1楽章 “海とシンドバッドの船”
ラルゴ・エ・マエストーソ 冒頭に荒々しく鳴り響くのがシャリアール王の主題。しとやかな木管楽器の和音に導かれて、独奏ヴァイオリンが可憐な^{かれん}シェエラザードの主題を奏でる。これからシェエラザードがシャリアール王に物語を聞かせるのだ。アレグロ・ノン・トロポの主部に入ると4分の6拍子で波打つような海と、滑るように前進する船の様子が描かれる。船乗りシンドバッドの冒険の始まりだ。物語に聞き入る姿をあらわすかのようにシャリアール王の主題を絡ませ、ときには独奏ヴァイオリンによるシェエラザードも姿を見せる。海は大きくうねり、力強く高揚した後、やがて波のリズムとともに静まって楽章を閉じる。

第2楽章 “カランダール王子の物語” レント この日もまたシェエラザードの主題に導かれて、新たな物語が始まる。アンダンティーノの主部では、おどけたようなファゴットによる

カランダール王子の主題が登場する。カランダールとは人の名前ではなく、家族や財産を捨てて遊行する^{たくはつ}托鉢僧のこと。『千夜一夜物語』には托鉢僧になった王子の話がいくつかある。このカランダール王子は道化者のようであるが、どこか悲哀も感じさせる。警鐘のような鋭いトロンボーンが主題を曲調を一変させ、緊迫感を漂わせる。しかしカランダール王子の主題を交えながら、ふたたびおどけた曲調に戻り、陽気な騒動がくりひろげられる。

第3楽章 “若い王子と王女” アンダンティーノ・クワジ・アレグレット 若い王子と王女の夢見るようなロマンス。中間部でシェエラザードの主題があらわれて、物語を聞かせるシェエラザードの姿が垣間見える。シェエラザードの語りに溶け合わさるように若い王子と王女のロマンスが重なり、次第に

熱を帯びる。幕切れはチャーミング。当初は恐る恐るシャリアール王に話を聞かせていたシェエラザードも、次第にリラックスしてきたのか。
第4楽章 “バグダッドの祭り、海、船は青銅の騎士のある岩で難破” アレグロ・モルト 第1楽章冒頭の荒々しいシャリアール王の主題が返ってくる。これにシェエラザードの主題が応える。ふたりの対話に続いて、活気にあふれた祭りの情景が描かれる。これまでの楽章に登場した主題を回想しながら、祭りは次第に高潮する。最高潮に達したところで、第1楽章の海の情景に戻る。大嵐に襲われた船は難破する。曲が静まると、シェエラザードの主題が返ってくる。高音を引き伸ばすシェエラザードに、低弦によるシャリアール王の主題がやさしく重なり合う。ついに王の傷心は癒えたのだ。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2（イングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（太太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、トライアングル、タンブリン、銅鑼）、ハープ、弦五部



〈シェエラザード〉ソロ・ヴァイオリン

長原幸太 Kota Nagahara （読響コンサートマスター）

広島県出身。東京芸術大学、ジュリアード音楽院に学ぶ。1994年ヴェニエフスキ国際コンクール（17歳以下の部）第3位。98年日本音楽コンクール最年少優勝。小澤征爾、岩城宏之、秋山和慶、ゲルハルト・ボッセらと共演。室内楽や各オーケストラの客演コンサートマスターとしても活躍し、2004年大阪フィル首席客演コンサートマスターに就任。06年から12年まで首席コンサートマスターを務めた。14年10月、読響コンサートマスターに就任。

6.17 [土]

6.18 [日]

道下京子 (みちした きょうこ)・音楽評論家

ワーグナー

歌劇〈さまよえるオランダ人〉序曲

作曲：1840～41年／初演：1843年1月2日、ドレスデン／演奏時間：約11分

リヒャルト・ワーグナー（1813～83）は、ライプツィヒ出身。オペラの作曲に際して、自ら台本も手掛けている。彼はオペラにおいて、歴史ドラマという枠を超え、より普遍的な民族の物語を描こうとした。また、〈トリスタンとイゾルデ〉以降は「楽劇」と呼ばれ、従来のオペラをより発展させ、音楽、演劇、文学、美術などの「諸芸術の総合（総合芸術）」を目指した。

1841年に完成した〈さまよえるオランダ人〉は、ワーグナーのレパートリーとして上演され続けている最初期の作品と言える。物語のもとになっているのは、ハイネの『フォン・シュナーベレヴォプスキー氏の回想』である。

ノルウェーの船長ダーラントの船に、オランダ人船長の乗る船が近づいてきた。呪われたオランダ人は、7年に一度だけ与えられた上陸の際に、永遠の愛を誓う女性にめぐり会うことができ

たならば、その呪縛から解放される運命にあった。オランダ人はダーラントの娘ゼンタとの結婚を許され、その後ゼンタと惹かれ合う。すでにオランダ人船長のことを知っていたゼンタは、自分がオランダ人を救う永遠の愛を誓う女性と信じ、恋人エリックと言い争いになってしまう。それを聞いたオランダ人は絶望して船を出港させ、ゼンタはその後を追って海に身を投げる。彼女の死によって、オランダ人は救済されるというストーリー。

このオペラは3幕からなるが、その中から本日演奏されるのは序曲である。序曲には、劇中で用いられる主題や動機がさまざまに現れる。荒れ狂う海が描写された曲の冒頭で、ホルンがオランダ人の主題を不気味に鳴り響かせる。また曲の途中、アンダンテの部分でイングリッシュ・ホルンを中心とした管楽器は、ゼンタのテーマを穏やかに奏でる。

楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部

ブルッフ

ヴァイオリン協奏曲 第1番 ト短調 作品26

作曲（改訂稿）：1867年／初演（改訂稿）：1868年1月7日、ブレーメン／演奏時間：約24分

マックス・ブルッフ（1838～1920）は、ドイツのケルン生まれ。歌手として活躍していた母親から音楽の手ほどきを受け、早い時期から音楽的な才能を発揮した。10代半ばには、作曲家のフェルディナント・ヒラーやカール・ライネッケらに師事する。1865年にコブレンツ、さらに67年にはゾンダーハウゼンの宮廷楽団の楽長のポストに就き、ベルリンやリヴァプール、ブレスラウでも指揮者として活動。また、長きにわたりベルリン高等音楽院で作曲の指導も行った。

ブルッフは、オペラや交響曲など、音楽のほとんどすべての分野にわたり作曲を手掛け、とりわけ優れた器楽作品を世に送り出した。彼はヴァイオリン協奏曲を3曲完成させている。本日演奏される第1番はコブレンツ時代に書かれたもので、彼の作品のなかではもっとも頻繁に演奏される。

彼はこの協奏曲を1866年に作曲して初演を行うも、不評に終わってしまう。その後、彼はクララ・シューマンにヴァイオリン奏者ヨーゼフ・ヨアヒムを紹介してもらい、助言を求めた。その助言をもとに、ブルッフは作品を

改訂した。この改訂稿の初演（68年）では、ヨアヒムが独奏ヴァイオリンを受けもった。また、とくに第3楽章にブラームスのヴァイオリン協奏曲との類似性も指摘されている。この協奏曲と同じ時期に作曲した交響曲第1番を、ブルッフはブラームスに捧げるなど、二人の作曲家の親交がうかがえる。

第1楽章 前奏曲：アレグロ・モデラート ト短調 独奏ヴァイオリンによるカデンツァ風のモノローグに続き、ヴァイオリンが主要主題をエネルギーに表す。ブルッフは、この楽章に「前奏曲」とタイトルを与え、自由な形式の表現を目指した。曲の終結部において、第1ヴァイオリンが変ロ音（シ♭）を鳴り響かせながら、そのまま第2楽章へと移ってゆく。

第2楽章 アダージョ 変ホ長調 叙情的な美しい楽章。ブルッフならではの豊かな旋律線が印象に残る。

第3楽章 アレグロ・エネルジーコ ト長調 曲の冒頭に、第1主題を形成する動機が反復されたのちに、独奏ヴァイオリンが第1主題を堂々と歌い上げる。ソナタ形式で書かれた躍動的なフィナーレ。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ブラームス 交響曲 第2番 ニ長調 作品73

作曲：1877年／初演：1877年12月30日、ウィーン／演奏時間：約43分

北ドイツのハンブルク出身のヨハネス・ブラームス（1833～97）は、1862年以降、ウィーンを拠点として音楽活動を行っていた。彼が完成させた4曲の交響曲は、ウィーン時代の創作である。これら4曲は、1876年から86年までの10年のうちに初演されている。第1番は着想から完成まで20年あまりかかったのに対して、第2番の創作期間はわずか4か月ほどであった。1877年6月、ブラームスはベルチャハでこの交響曲第2番の作曲を始め、10月には書き終えた。

この交響曲について、彼は出版者ジムロック宛てに、次のような手紙をしたためている。「私はこれまで、これほど悲観的で柔和な作品を書いたことがない。スコアは、死亡通知の黒枠をつけて出版しなければならない」

初演は大成功で、音楽評論家のハンスリックは「とにかく良い音楽を聴きたいと願う、すべての人たちのために書かれたと言ってよい曲」と好意的な批評を寄せた。同時にブラームスは、友人のラハナー宛ての書簡で第1楽章のトロンボーンの「鋭い影」について述べており、明朗な楽想とは対照的な

メランコリーも作品には込められている。それは葬送行進曲を思わせる第2楽章にも反映されている。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロppo
ニ長調 曲の冒頭で低弦楽器の奏でる二度音程（レド♯-レ）の動機は、この交響曲の基本的な動機であり、作品全体を統一しようとするブラームスの動機労作の姿勢がうかがえる。牧歌的な第1主題は、ホルンによって穏やかに鳴り響く。

第2楽章 アダージョ・ノン・トロppo
ロ長調 チェロの表す主旋律に含まれる下行音階の動機はボリフォニックで、厳かな雰囲気^{おごそかも}を醸し出している。

第3楽章 アレグレット・グラツィオーソ（クワジ・アンダンティーノ）
ト長調 チェロの弾むようなピッツィカートに乗って、オーボエが主旋律を歌い上げてゆく。A-B-A-B-Aの形式で書かれているが、Bは基本的にAの素材を用いている。

第4楽章 アレグロ・コン・スピーリト
ニ長調 朗らかな情趣に満ちたフィナーレである。弦楽器の弱奏による第1主題と、ヴァイオリンとヴィオラによる穏やかな第2主題を軸としたソナタ形式。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

6.24 [土]

6.26 [月]

柴辻純子（しばつじ じゅんこ）・音楽評論家

プロコフィエフ ピアノ協奏曲 第3番 ハ長調 作品26

作曲：1921年（1913年、1916～1917年）／初演：1921年12月16日、シカゴ／演奏時間：約27分

セルゲイ・プロコフィエフ（1891～1953）は1918年、ロシア革命の混乱を避けて、シベリアと日本を経由してアメリカに渡った。日本では同世代の音楽評論家、大田黒元雄（1893～1979）と親交を結び、東京と横浜で自作を含むピアノ・リサイタルを行うなど、日本の楽壇にも大きな影響を与えた。

プロコフィエフは5曲のピアノ協奏曲を完成させたが、第3番は、第2番完成直後の1913年に着手。その後も部分的なスケッチは残しているものの、アメリカへの移住で作曲は中断された。しばらく間があいた後、1921年夏にフランス北西部ブルターニュで再開された。同地ではロシアの象徴派の詩人バリモントと旧交を温め（ピアノ曲集〈束の間の幻影〉op. 22のタイトルはバリモントの詩による）、このピアノ協奏曲は彼に献呈された。

新古典主義的な明快な書法とロシア的な力強い生命力が息づくこの曲は、

同年末に作曲者自身のピアノで初演された。しかし評判は芳しくなく、翌年、クーセヴィツキーの指揮でパリで再演されると熱狂的に迎えられた。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ、ハ長調 ソナタ形式 クラリネット独奏の哀愁を帯びた旋律で始まる序奏に続き、主部では独奏ピアノが快活な第1主題を示し、平明な第2主題は軽快な伴奏にのってオーボエ独奏から始まる。穏やかな展開部を経て、ピアノが華々しく活躍する。

第2楽章 アンダンティーノ、ホ短調 主題と五つの変奏 フルートとクラリネットの^{ひな}鄙びた主題から始まり、各変奏はピアノが主導する。

第3楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ハ長調 ロンド形式 ユーモラスなロンド主題が活発な主題や叙情的な主題と対比させられ、強烈なリズムとピアノの高度な技巧が炸裂する。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、カステネット、タンブリン）、弦五部、独奏ピアノ

R.シュトラウス アルプス交響曲 作品64

作曲：1911～1915年／初演：1915年10月28日、ベルリン／演奏時間：約47分

リヒャルト・シュトラウス（1864～1949）は、リストやワーグナーを継承して発展させた交響詩やオペラに数々の傑作を残した。まずは交響詩に集中的に取り組み、大編成のオーケストラを駆使して作曲家としての手腕を最大限に発揮する。そして、1898年の〈英雄の生涯〉を作曲したのを最後にオペラの創作へと移り、その後シュトラウスが書いた大規模な管弦楽曲は、〈家庭交響曲〉（1904）とこの〈アルプス交響曲〉を数えるだけである。

シュトラウスは、1908年にドイツ・アルプスの最高峰ツークシュピッツェを見上げるガルミッシュ・パルテンキルヒェンに山荘を構えた。〈アルプス交響曲〉は、まさに目の前に広がる光景を音楽にしたもので、雄大な自然の移り変わりや、登山者がアルプスの山を登り、頂上をきわめ、下山する様子を、多種多様な打楽器を含み、舞台裏の13本の金管楽器が加わる巨大編成の管弦楽で鮮やかに描いた。これは少年時代からの夢でもあったが、完成に至るまでの道のりは長かった。

「私の〈アルプス交響曲〉を反キリスト者（アンチ・クリスト）と呼ぶことにしよう。なぜなら、自己の力による

道徳的な浄化、束縛からの解放のために、永遠で崇高な自然への崇拜があるからだ」。シュトラウスが語る「反キリスト者」という表現は、フリードリヒ・ニーチェ（1844～1900）によっている。『反キリスト者—キリスト教に対する呪詛』^{じゆそ}（1895年出版）は、ニーチェの事実上最後の著作で、反キリスト者とは、キリスト教やキリスト教徒を指す。ニーチェは「私はキリスト教に有罪の判決を下す」と記したようにキリスト教を徹底的に批判した。

シュトラウスとニーチェを結びつける創作といえば、ニーチェの主著『ツァラトゥストラはかく語りき』（1892年出版）と、同名のタイトルで作曲家が「ニーチェの天才を讃えるもの」として書いた交響詩がすぐに思い浮かぶだろう。〈ツァラ〜〉ではニーチェの思想を描き出したが、〈アルプス交響曲〉とニーチェの関係となると、〈ツァラ〜〉のようにわかりやすくない。

創作を辿ってみると、〈アルプス交響曲〉は、最初の構想段階では「芸術家の悲劇（日の出）」というニーチェ風のタイトルが付いていた。1900年に着想され、その後構想は広がり、1902年頃のスケッチでは4楽章構成となり、

第1楽章が「夜明けと日の出／登山：森（狩り）」等々の記述もみられ、現在のかたちに近い。自然への讃美と芸術家の内的発展を結びつける考えもあったが、構想を練り直し、1911年からは自然礼賛へと内容を変更した。最終的に音の大伽藍^{がらん}といった様相のこの作品から表面上、哲学的な思索を感じさせるものはない。しかしそこには、自然の力を前にして己の無力を悟るというニーチェに端を発するモチーフが隠されていることに気づくだろう。

単一楽章の長大な交響曲には、各場面を示すタイトルが付いている。夜：弦楽器とファゴットの下行音型で夜の情景が暗示され、続く金管の荘厳な山の動機はしばしば登場する。日の出：大管弦楽で強烈な輝きを放つ太陽の動機が現れる。登り道：いよいよ登山が始まる。低弦とハープによる登山の動機が現れ、岩壁の動機は金管で奏される。舞台裏からは狩りのホルンが響く。森への立ち入り：弦楽器で森のざわめきが暗示され、森の旋律が金管で重々しく響き、登山の動機も絡む。小川に沿って歩く：川の流れが描写され、次第に高まる。滝：岩壁から落下する水の様子が描かれ、登山の動機も

現れる。幻影：登山者は滝にみとれる。ハープのグリッサンドが美しい。花咲く牧場：甘美な旋律が静かに広がり、ピッツィカートで気持ちも浮き立つ。山の牧場：のどかな音楽で、遠くから放牧のカウベルが響く。林で道に迷う：迷路の動機に登山の動機と岩壁の動機が絡む。氷河：トランペットが高らかに響き、登山の動機が現れる。危険な瞬間：登山者の滑り落ちそうな様子が描写される。頂上にて：トロンボーンに導かれ、オーボエの美しい旋律から壮大な音楽が広がる。幻：これまでの動機が次々と現れる。霧が立ちのぼる：音楽は静まり、霧が空を流れる。日はしだいにかげる：太陽の動機が弱々しく現れる。哀歌：太陽は隠れ、木管が寂しげな旋律を歌う。嵐の前の静けさ：ティンパニのトレモロが遠雷を暗示する。鳥たちは不安そうに囀る。雷雨と嵐一下山：登山者は慌てて下山する。登山の動機を逆行され、各動機は山を登るときと逆の順番で再現される。日没：太陽の動機が大きく引きのばされ、雄大な景色が描写される。終結：これまでの各動機が現れ、登山者は一日を振り返る。夜：冒頭と同じ夜の様子が描写され、山の動機や登山の動機が静かに回想される。

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、ヘッケルフォン、クラリネット3（バスクラリネット持替）、エスクラリネット、ファゴット4（コントラファゴット持替）、ホルン8（ワーグナーチューバ持替）、トランペット4、トロンボーン4、チューバ2、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、銅鑼、カウベル、ウインドマシーン、サンダーシート、グロッケンシュビール）、ハープ2、チェレスタ、オルガン、バンダ（ホルン9、トランペット2、トロンボーン2）、弦五部